さくらんぼがり　6

さくらんぼがり　6

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19976119

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 濁点喘ぎ, ♡喘ぎ, 最霊, もぶお兄さん×霊幻

師匠総受けです。とある悪癖のある師匠です。今回は最霊です。もぶお兄さん×師匠、♡喘ぎ、濁点喘ぎを含みます。良ければどうぞお付き合いください。倫理がアレです。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

さくらんぼがり　6

「ここだな？調味市の口とやらは」
印刷した地図を何度も確認しながら霊幻が呟く。
調味市の口。ここ数ヶ月の間で囁かれ始めた都市伝説である。
とある廃ビルに入ると、嘘つきは行方不明になり、正直者は何ともなく出てくる、という『真実の口』をもじったような噂だ。
面白がった肝試しが後を立たず、こまった所有者が数多くの霊能力者に頼んだものの、「ここは手に負えない」と断られたという除霊に、霊幻は来ている。
後ろには茂夫、エクボ、芹沢、花沢、律を連れていた。
（これでダメなら誰も除霊できねーよ）
という布陣である。なお本日、勝手に相談所に集まってきたメンツだ。
「うーん……これ本当に強いですよ、霊幻さん」
難しい顔をして言う芹沢に「えっ」と霊幻は声を上げる。
「しかも都市伝説として力をつけてきてやがる。少なくとも霊幻、お前は今回は中に入らない方がいいぞ」
そう言うエクボに、ふむ、と霊幻は唇に手を当てて考え込む。
（嘘つきは行方不明になる、んだったな）
「分かった。俺はここで待ってる」
都市伝説のルールはかなりの強制力を持つ。少なくとも『嘘つき』である霊幻は、本当に行方不明にされかねなかった。
「確かに凄く強い悪霊の気配がする……律、僕から離れないでね」
「兄さん、分かったよ」
「花沢くんも、俺から離れないで」
「分かりました」
「霊幻も俺様から……あれ？」
風だけがエクボの後ろを吹き抜けていく。
「あいつっ、この一瞬で行方不明になりやがった！」

※

「思わぬ拾い物をしたな」
気絶させて掻っ攫った男を廃ビルの屋上に横たえながら、緑衣の男は目を細めた。
「影山少年が強力な能力者たちを連れて現れた時はどうしようかと思ったが……」
せっかくいい餌場になっていたこのビルから離れることも考えた男は、その中に無防備な無能力者を見つけたのだった。
（この男は少年の師であったはずだ）
この無能力者に憑依してしまえば、あの最強の能力者である影山茂夫もそうやすやすと手は出せないはず。
そう思った悪霊の男は無表情に無能力者を見下ろして、ずるりとその身体の中に侵入した。

（まずこの男がどんな人間か、ある程度把握しないとな）
「……暗いな」
真っ黒な霊幻の精神世界を男は歩いていく。
と、突如明るい室内に男は放り出された。
「おっ、とと」
顔を上げて男はギョッとする。
「あっ♡あっん♡は、あっ♡♡♡」
ちょうど無能力者の男が馬乗りになり、誰かとまぐわっているところだったからだ。
「すまない！こんなものを覗き見るつもりは……！」
どこか純なところのある男は慌てて記憶から出ようとする。
「すごいっ♡い、い……っ♡♡♡」
だが無能力者があまりにも甘い声を出すので、少し興味がわいてしまった。
まじまじと近付いて見つめると、無能力者が交わっているのは女ではなく、男であることが分かった。
「……衆道か」
悪霊の男は誰にともなく呟く。
「あ、ぁっ♡◯◯っ♡」

この男の恋人は◯◯と言うのか、と思わぬ収穫に男は満足する。
「この記憶はもういいだろう」
「イ、くぅ……っ♡」
びくん、とのけぞって絶頂した男の。
悩ましく紅潮した表情に目が釘付けになって、悪霊の男はしばし呆然とする。
が、はっとして歩き出した。
「？、？？」
ドキドキと跳ねる胸を押さえながら。
「……もう少し深く潜るか」
とぷん、と足元の床が溶けて飲み込まれる。
悪霊の男は霊幻の中を泳ぎながら、うっすらとした灯りに近づいた。
どこかの会社の中だ。
スーツを着た無能力者が段ボール箱を抱えて歩いている。
「仕事場か」
しばらく眺めていると、１人の男が無能力者に近づいてきた。
「よう、新隆」
だがその姿を見て悪霊はギョッとした。顔がぐちゃぐちゃに塗りつぶされている。
「これは……意図的に記憶を壊した跡だな」
死んだ目をして返答する無能力者の声もよく聞き取れない。
「これじゃあ使い物にならん」
ため息をついて悪霊は記憶に背を向けた。
とぷん、とまたさらに深く潜る。
次はどこかの事務所の中で、悪霊がよく見知った顔が談笑していた。
影山少年と、いつぞやの悪霊と、知らない大男。
しばし悪霊はその会話を眺める。
が、ふと違和感に襲われた。
（無能力者の男はどこだ？）
いない。
この明るく楽しそうな光景の中に、無能力者の男はいないのだ。

ゾク、と悪霊の男が悪寒を感じたと同時に、ぐんと後ろに引っ張られた。
「……っ！」
悪霊の男は顔を腕で庇いながら動きが止まるのを待つ。
男は暗い空間に放り出された。
「……？」
小さなブラウン管テレビだけが光を発している。
その画面には、先程の事務所の光景が映っていた。
テレビの前には、膝を抱えてぼーっと画面を眺めている男がいる。
（本人に接触してしまったか）
男──新隆はぴくりと身体をふるわせて、おそるおそる振り向く。
「……最上啓示？」
「ほう、よく分かったな」
悪霊はうっすらと笑う。
「有名人だからな」
よいしょ、と新隆は立ち上がる。
「俺に何の用だ？」
「……」
最上は答えない。答える必要が無く、教えてやる義理も無いからだ。
「これは夢か？」
「あてててててっ！」
新隆はギリっと最上の頬をつねった。
「自分の！頬で！試せ！！ヒトの頬でやるんじゃない！！」
「ふーむ、夢じゃ無いとすると……精神世界とかいうやつか」
ふむ、と新隆は唇に指を当てて考える。
その仕草に最上はドキっとした。
さっきの痴態を思い出したのだ。
「おおかた俺の身体を乗っ取ってモブや芹沢に言う事を聞かせようってところだろ。で、俺の精神はいざと言う時の人質にする。どうだ？当たったか？」
「……余計な事を言う癖は改めたまえ。長生きしないぞ」
図星を指された最上は憮然とそう答える。

しかし新隆は怯えることもなく、堂々としていた。
「……怖く無いのかね？」
生前ですらどこか人々は最上に怯えていた。
なのに、新隆は堂々と最上とやり合う。最上は少し興味を持った。
「うーん。あんた話が通じる大人だろ。なら、何となくそんなに怖くないんだよなあ」
顎に手を当てながら新隆はうなる。
「それに、俺にチンポおっ勃ててる男ってのは軒並みそんなに怖くないっていうか」
「は！？！？」
思わず最上は自分の股間を見る。
言われて見れば……まぁ、多少？うっすらと勃ち上がっているような、そうでもないような……と言う状態だった。
「あんたさぁ」
「！？！？」
いつの間にか接近していた新隆に最上は虚を突かれる。
「俺が男に抱かれてるところ、見ただろ」
すり、と股間を撫でられて、最上は息を飲む。
「……っ」
「あは、正直だなぁアンタ。……俺を見る目がさぁ、やらしーのよ。俺が男と寝てるのを知ってるヤツの目」
最上の股間を撫でる新隆の目が、挑発的に細められる。
「……あんたさぁ、童貞だろ？」
「どっ！？どどどどど、ど、ど、どっ、童貞ではないッ！！」
「……」
じとりと新隆は最上を見つめる。
「何だねその目は！！」
「……こんなに勃たせて、説得力皆無だぞ、最上さん」
「それは君が触るからだろう！？」
この男の痴態を見るんじゃなかった、と最上は後悔する。
どれだけ乱れるのか、どれだけ色っぽくなるのか知ってしまっているのは、最上には不利だった。
そもそも、これは精神同士の闘いである。

経験の無い最上にとって、百戦錬磨の童貞殺しである新隆は、天敵と言って良かった。
「なぁ最上さん、フェラってされた事ある？」
ついっ、と唇を撫でながら新隆に言われて、ドクっと最上の無いはずの心臓が跳ねた。
「ふぅん、無いんだぁ」
「そっ……！きっ……！」
いつの間にか現れていたベッドに、トン、と最上は突き飛ばされる。
腰掛けた足の間に、新隆はひざまずいた。
「気持ち良くしてあげるなっ♡」
カチャカチャとズボンの金具を外す新隆を信じられないものを見る目で最上は見下ろす。
「こっ、恋人に悪いと思わないのかね！？こんなことをして！！」
「はぁ？俺、恋人いねーけど」
ぱく、と性器を咥えられて最上は身震いする。
暖かい口内はこの上なく気持ちいい。カリ首を柔らかい舌が撫でて、たまらなかった。
「は！？じゃあ、あの男は……っ！？」
「んー、」
咥えたまま声を出されて、最上は顔を歪める。
身体が金縛りにあったかのように動かない。いや、最上の深層心理が抵抗を拒んでいるのだ。
ストイックに生きてきたことが、こんな所でアダになった。
ヤってみたい。
この生意気そうな男を組み敷いて、あの顔をさせてみたい。
最上の本音は、どれだけ取り繕っても、それだった。
「たぶんワンナイトの誰かじゃないかなぁ……イラマするから、ちょっと黙ってて」
「っ！」
ずにゅるる、と喉の奥まで飲み込まれて、ガクガクと足が揺れた。
「新隆くんっ……！」
は、は、と最上の息が上がる。

ぐしゃ、と山吹の花色をした髪を掴んだ。
「ん、ん……」
新隆は気にせずディープスロートする。
他人の口からもたらされる快感に、最上は頭まで総毛立った。
「う、うっ……はぁ、っ……！」
じゅるっ、がぽっ、と暗闇の中に淫猥な音が響く。
「出るッ……！出る、からッ……！」
そう叫んだ最上の怒張を喉奥まで飲み込んで、きゅっと新隆は締め付けた。
「……っ！」
ごくん、と新隆の喉が鳴る。
ゆるゆると口から性器を抜いた新隆は、べ、と舌を突き出して口の中を最上に見せつけた。
「ごちそーさま♡」
「キミなぁ……！」
煽られた最上はぐいっと新隆をベッドに上がらせる。
「……誘ったのはキミだ」
「ん、そーね」
ベッドに仰向けに寝転がる新隆に最上は手をかざす。
すうっ、と着衣が空気に溶けた。
「えっ！？」
消えたグレースーツに新隆が動揺する。
「なかなか見ものだな」
男の身体だ。どこからどう見ても。
だが最上はこの身体が男に穿たれて、どう乱れるのか知ってしまっていた。
それが精神を昂揚させる。
「大丈夫か？勃ちそうか？もっかいフェラ……うぐっ」
「おしゃべりはもう結構」
最上は新隆の口の中に指を入れて力を込める。
「んッ！？」
新隆は目を見開いてその感覚に流された。
「指に霊力を纏わせた。キミみたいな無能力者ではひとたまりもな

いはずだ」
「んっ……ん、んんっ……」
新隆の声が徐々に甘く上擦っていく。
「自分の方が優位だと思ったか？霊力で散々なぶってやるから、覚悟しろ」
「ん――っ！」
敏感な上顎を霊力を帯びたピリピリする指で擦られて、新隆は涙目になる。
思わずズリ上がって逃げようとした身体を引きずり下ろし、最上は楽しさを感じ始めていた。
「ここは精神世界だ。キミは私から逃げはできんよ」
新隆の怯える目に最上の嗜虐心が満たされていく。
「さあ……どう料理してやろうかな」
「ひっ」
口から指を抜いて、最上はすすすと新隆の身体に触れる。
「あ！あっ、あぁ……ッ！」
指がたどった所から痺れるような快感が起こって、新隆は息をつめる。
「やっ……あ、あーっ！！」
ぐり、と乳首に指を押し付けられ、トロリと新隆は精をこぼした。
「乳首だけでいったのかね？」
「もっ……やらぁっ……」
ふむ、と楽しそうに最上はアゴに手を当てる。
「……これで魔羅をいじったらどうなるんだろうね？」
にやあ、と悪霊らしく目口が割れた。
「！！や、やめっ……」
ぴと、と最上の指先が陰茎の敏感な裏側に当てられる。
「あ、あ……ッ！！」
新隆が唇を噛んで眉根を寄せた。
「だらだらとヨダレを垂らしているな、可哀想に」
嘲笑いながらくちゅ、と音をさせて最上はつつつと指を先端に向けて動かしていく。
「ん、んぅ、んん……っ」

新隆はシーツを掴んで必死にその快感に耐えていた。
が。
「っあ──！！」
つぷ、と鈴口を霊力を込めた指で電流を流すように差し込まれて、思わず絶叫してしまった。
「おれぇ……っ♡おかひくなっちゃうぅ……っ♡」
腹に精液を飛ばしながら涙を流す新隆を満足気に最上は見下ろす。
「さて……コチラの具合はどうかな？」
最上は新隆の後口に指を差し入れる。
「……！！」
そして目を見張った。
熱く蕩けるような蜜壷。絶頂の余韻でひくつく肉壁。ザラザラでこぼこした天井。
（これはもしかしなくても、名器というやつでは？）
これでは突っ込んだ瞬間手綱を新隆に握られる可能性があった。
「あっ……あ、っん……」
うーん、と新隆の内部を探りながらしばし最上は考えて、
（よし、抵抗できないほどイかせてから挿れよう）
と結論付けた。
「あ゛っ！？」
引き抜こうとした指がコリっとしたものに触れた瞬間、新隆の身体が跳ねて最上は驚く。
「……ココがいいのかね？」
「あ゛ぁ゛っ！やめっ、やめてぇ……っ！」
コリコリと前立腺を霊力を込めた指でなぶられて、新隆の足がシーツを波打たせる。
「ふ、ぅ、っん〜〜〜〜ッ♡」
びくびく、と新隆の腹筋が痙攣して、がく、と全身の力が抜けた。
「もっ……やめ……イって、イってる、から……！！」
ひくひくと震える身体に最上は首を傾げる。
「何も出てないが」
「メスイキしてんの……！出さずに……イっ……あ、あっまたぁ……っ♡」

ぐっぐっと前立腺をいじり続ける最上のせいで連続で絶頂をキメた新隆が眉を悩ましく下げる。
「やだぁ……っ♡」
ごくり、と最上の喉が鳴った。
「……そろそろいいだろう」
指を引き抜いて、怒張をひたりと押し当てる。
「ん……いいよ、来て……」
「……っ」
なんだかたまらない。最上は一気に新隆を貫いた。
「あ……っ！」
衝撃に新隆は枕を掴んだ。
「これは……思った通り……」
最上は額に脂汗を浮かべて射精を耐える。
気を抜くとすぐ出てしまいそうだった。
「っん♡あっ♡がまん、しないでぇっ♡」
「あ……？」
すり、と新隆は最上が入っている腹をさする。
「いーよっ♡おれんナカ、いっぱいびゅーびゅーしてっ♡」
──まーきんぐ、して？
かっ、と最上の頭に血が昇る。
「お望みならっ、何度でも穢してやろう……！」
「あ♡」
ぐ、と奥に押し付けてはぜる。
その熱さに、新隆はウットリと舌舐めずりした。
「おいし……♡」
「……っ、ふーっ、ふーっ……！」
最上の腰は止まらない。先程見つけた前立腺目掛けて何度も先端を打ち付ける。
「あっ♡そこっ♡イイっ、もっとぉっ♡♡」
うっすらと汗ばみ色付いた肌を、思わず最上は愛おしげに撫でる。
「イけ……！」
「あ゛ぁ゛っ♡♡♡」
霊力を込めて穿たれ、新隆は白い喉を晒して絶頂する。

「……っく」
搾り取ろうと快感にうねる内部に、また耐え切れず最上は精を吐き出した。

※

「はーっ、気持ち良かったぁ♡」
大の字になって後ろから精を垂らしながら、新隆はスッキリとした様子で言う。
「……そうかね」
「うん、サイコーだった」
ふふん、と最上は機嫌を良くする。なんだ、セックスなんて、ちょろいな、と思いながら。
「俺さぁ、アンタのファンだったんだよね」
「……そうか」
「だから、最上さんとヤれて、すげー嬉しい」
はにかむ新隆に、私もだ、と言いかけて、最上は口ごもる。
慣れてなくて、上手く口が回らなかった。
「好きだよ、最上さん」
「……！！」
なんということだ、と最上は震える。
これは、責任を取らなくてはいけないのでは……？と元来真面目な最上は考え込んでしまった。
「……新隆くん、」
そうだ、永い悪霊生活、しばしの寄り道ぐらいはいいだろう。幸いこの青年は同業者のようだし、その仕事を手伝って……と覚悟を決めて顔を上げた最上の眼前で。
もう新隆は、最上を見てはいなかった。
「新隆くんっ……！」
焦りを覚えて手を伸ばした最上の目の前で、とぷんっと新隆の身体は沈んでいく。
「待っ……！」
追いかけて更なる深層心理に沈もうとした最上の手が、バチィっと

はじかれた。
明確な拒否である。
「待ってくれ、気が変わったんだ。私はキミのそばに居よう。キミを何者からも守ろう。仕事も手伝ってやる。だから……」
ぐん、と最上の身体が上に引っ張られる。
「くそっ」
最上はその新隆の拒絶に抵抗しようとしたが、霊力が足りないのに気が付いて愕然とした。
新隆のナカに出し過ぎた（・・・・・・・・・）のだ。
「嘘だろう……！！」
そうして最上啓示は、新隆の身体から弾き出された。

※

「「「「「……」」」」」
慌てて悪霊の巣の中を大捜索したその目的の人は、ビルの屋上で爆睡していた。
「……心配して損した」
ぽつりと律が呟く。
「師匠、起きてください、師匠。……師匠？」
茂夫が揺さぶっても霊幻は目覚めない。
「まてシゲオ。霊幻の身体の中に不釣り合いなほど大量の霊力が注がれてる。そいつはキャパオーバーを起こしてるだけだ。明日の朝には消化して目を覚ますと思うぜ」
「霊力が注がれてる……」
いない親玉。そして霊力を注がれた霊幻。
「まさか……」
芹沢の言葉に、全員が同じことを考えた。

この人、悪霊の童貞を喰ったのでは？と。

※

霊幻をアパートに送り届けて、寝かせて。
茂夫、エクボ、芹沢、花沢、律のメンバーはカラオケボックスに来ていた。
「えーでは、第三回霊幻新隆被害者の会を開催する」
「私も入れてもらおうか」
ぬるっと壁から最上が出てきて茂夫たちはびっくりする。
「……まさかあのビルに居たのって」
「そうだ、私だ」
茂夫の言葉に最上はフードメニューを見ながら応える。
「で、さっくり霊幻の野郎に童貞と霊力喰われた、と」
「……」
ジロリ、と最上はエクボを睨んで。
「……このハニトーとかいうものはなんだね」
と、のたまった。

「「「「「「執着心を甘く見ないで貰いたい」」」」」」